

# 健康・医療の行動経済学的研究

Behavioral Economic Analysis on Health

プロジェクトリーダー 大竹文雄（経済学研究科教授）

学内のコアメンバー

平井啓（人間科学研究科准教授） 山崎吾郎（COデザインセンター准教授） 上田豊（医学部産婦人科学助教）

足立浩祥（保健センター医学部精神科学准教授） 祖父江友孝（医学部環境医学教授）

## 1. プロジェクト概要

病気になって病院に行き、医者から病気の治療方針や手術についての説明を受けた経験がある人は多いでしょう。その際、患者はさまざまな意思決定を迫られます。医者は、治療法をいくつか提案して、それぞれのメリットとデメリットを述べます。「後遺症が出る確率は何パーセント、うまくいく確率は何パーセントです」、「もう少し検査をすると正確なことがわかるかもしれないですが、検査をするには痛みと傷跡が残ります」というものです。「終末期になった時に、人工呼吸などの生命維持治療を行いますか?」という質問を受けることもあります。こういう質問に、すぐに答えられる患者は多くありません。選択の自由があることは嬉しいですが、医療の専門家でもない患者が、医者から与えられただけの情報で正しい意思決定をできるとは限りません。もう少し患者が意思決定しやすいように聞いてもらえたら、と多くの人は思っているでしょう。

一方で、医療者側は患者に病状と治療方針を説明して、その同意を取る必要があります。しかし、患者がなかなか意思決定してくれなかったり、医学的にあまり望ましくない治療方法を要望してきたりするという経験を持っています。その際、正しい情報を提供さえすれば、患者は合理的な判断をするはずだ、ということを医療者は考えていることが多いようです。実際、ある医療者は「行動経済学を知るまでは、患者への情報提供が足りないから、患者が良い意思決定ができない。もっと、情報を提供すれば必ず患者は良い意思決定ができるようになる」と考えていたと私に語ってくれました。

このような患者を合理的意思決定者としてみなす医療者の想定は、伝統的経済学におけるホモエコノミカス（合理的経済人）の想定を思い起こさせます。ホモエコノミカスとは、高い計算能力をもって全ての情報を用いた合理的意思決定を行う人間のことです。意思

決定能力が弱っていることが多い患者を扱う医療の分野で、ホモエコノミカスとして患者が捉えられているのは不思議です。そこで、行動経済学を健康・医療分野に応用するという学際的共同研究が始まりました。本プロジェクトは、医学、公衆衛生学、心理学、人類学、行動経済学といったさまざまな分野の研究者が共同研究を行ってきたものです。

## 2. 2018年の取り組みと成果

2018年においては、子宮頸がんワクチンの接種行動、終末期における抗癌剤治療についての患者の意思決定、臓器提供の意思決定などの共同研究を継続する



『医療現場の行動経済学』

## 医者と患者のすれちがいの解決

とともに、いままでの研究を大竹文雄・平井啓編著『医療現場の行動経済学』（東洋経済新報社）として刊行しました。この本の構成は、次の通りです。本は、第1部「医療行動経済学とは」、第2部「患者と家族の意思決定」、第3部「医療者の意思決定」の3部に分かれています。第1部は、「第1章 診療現場での会話」、「第2章 行動経済学の枠組み」、「第3章 医療行動経済学の現状」であり、全体の分析枠組みを提供しています。第2部は、「第4章 どうすればがん治療で適切な意思決定支援ができるのか」、「第5章 どうすればがん検診の受診率を上げられるのか」、「第6章 なぜ子宮頸がんの予防行動が進まないのか」、「第7章 どうすれば遺族の後悔を減らせるのか」、「第8章 どうすれば高齢患者に適切な意思決定支援ができるのか」、「第9章 臓器提供の意思をどう示すか」となっており、患者や家族が医療で直面する意思決定におけるさまざまな行動経済学的なバイアスを、実例や研究結果をもとに説明しています。行動経済学的な意思決定の歪みは、患者だけではなく医療者にも存在します。第3部は、「第10章 なぜ一度始めた人工呼吸管理はやめられないのか」、「第11章 なぜ急性期

の意思決定は難しいのか」、「第12章 なぜ医師の診療パターンに違いがあるのか」、「第13章 他人を思いやる人ほど看護師に向いているのか」という医療者側のバイアスに焦点を当てています。

この本の出版の際には、SSIの後援で8月4日に東京で出版記念フォーラムを開催しました。東京駅近辺で開催したフォーラムには、医療関係者、マスコミ関係者などを含む85人の参加がありました。この本は、朝日新聞、日経新聞、週刊新潮、週刊文春など多くのメディアで書評が掲載されました。その結果、刊行後半年間で4刷になり、販売部数は1万5千部になっています。医療関係者からの問い合わせや講演依頼も多く寄せられています。

## 3. プロジェクトの今後

『医療現場の行動経済学』では、行動経済学を利用することで、医療者と患者のバイアスとその修正が可能であることを示すことができました。行動経済学の理論からは、どのような伝え方が望ましいか、という提案を複数することは可能です。しかし、複数の提案

の中でどの手法の効果が大きいのかは、患者の特性、病気の状況、地域性などに依存します。また、表現方法のわずかな差が大きな違いをもたらすことも考えられます。研究成果を現場で使えて、課題を解決することが可能な知識にするには、そうした細かい分析が必要です。今後も、学際的なチームで研究を継続し、医療現場における課題解決を進めていきます。



プロジェクトリーダー 大竹文雄教授